

これらのことを更にくわしく調べるため、生徒を自己評価の結果から上位、中位、下位の3グループに分けて分析したのが図-10の右に示すものである。

上位の生徒と比較して、中位や下位の生徒の事後の伸びが大きいことが、より明確に表れている。

●グループの変容	事前	事後	変容
上位の平均	3.49	3.65	+ 0.16
中位 "	2.88	3.18	+ 0.30
下位 "	2.20	2.59	+ 0.39

(図-10より)

② クラス全体を見ても情報手段の理解と操作能力の習得に関連する「情報科学の基礎の理解⑩」「情報手段の特徴の理解⑪」「情報手段の基本的な操作能力⑫」の要素の伸びが大きい。

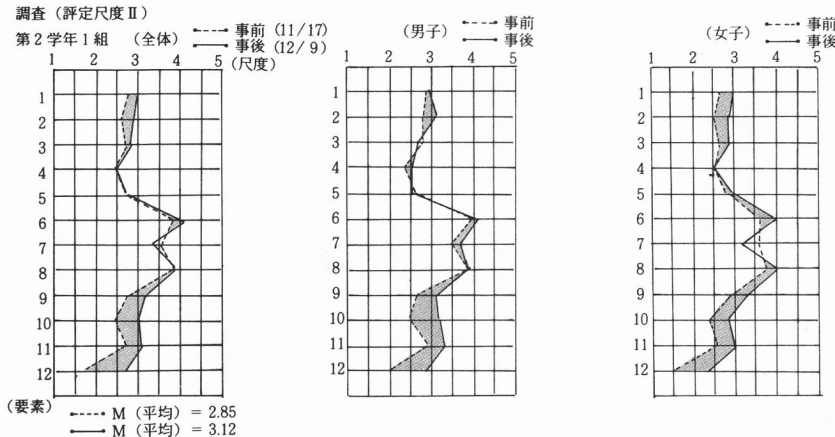


図-11 クラス全体の変容

わずかな時間ではあるが、事前に、CAI教材を利用して、コンピュータ操作の練習をしたことは、本時の成果をあげるためにかなり有効であったと思われる。

また、本時の授業で必要な情報をコンピュータから自由に引き出せることを知った生徒は、大変な驚きを見せていたが、自分で情報を引き出すという経験はコンピュータの特徴の理解につながり、更に、ほとんどの生徒が、現在の情報科学の基礎を実感としてとらえたものと考えられる。

●学級平均の変容	事前	事後	変容
操作能力の習得 ⑫	1.65	2.70	+ 1.05
情報科学の基礎理解⑩	2.45	3.00	+ 0.55
情報手段の特徴把握⑪	2.75	3.10	+ 0.35
情報選択の能力 ②	2.26	2.90	+ 0.25
情報収集の能力 ①	2.80	3.00	+ 0.20

(図-11より)

③ 情報化社会の認識に関連する「情報化社会の認識⑥」「情報化の進展の影響の理解⑦」「情報の重要性⑧」は事前テストの段階から、他の要素よりは比較的高い値を示した。このことから、中学2年生ではあるが、生徒たちは高度情報社会が進んでいることをマスコミやさまざまなメディアを通し、実際の家庭生活や社会生活において体験しているものと考えられる。

④ 授業全体を通して生徒たちの反応はコンピュータの操作について見れば、授業での活動、授業後の感想文、自己評価の評定値の変容などから判断して、きわめて好感をもったようである。やや時間オーバーぎみの授業であったにもかかわらず、もっと時間をかけてやって欲しいという声が圧倒的であった。

研究の視点で述べた通り、「情報手段の基本的操作能力⑫」を向上させることにより、他の情報処理や創造力を高めようとしたが、本時の授業を行ったことにより、学級平均での各要素はもとより(図-11参照)、全体の要素の平均でも事前から事後にかけて、2.85→3.12と0.27の向上が見られた。これらのことから考えて、成果は大なるものがあったといえよう。